

《Ⅰ. 研究報告》

助成年度 Grant Year	2023 年度
研究テーマ Research Title	がん遺族が求める一般病棟遺族ケアプログラムの構築に向けた 要因の検討
研究代表者 Representative	福島 桐子
代表者所属機関 Organization	名桜大学大学院看護学研究科看護学専攻(博士前期課程)
職名・課程名 Position/Program	大学院生・博士前期課程

①研究概要

研究の背景、目的・リサーチクエスチョン、学術的重要性、対象について記述してください。

【研究の背景】

わが国において、がんは昭和 56 年より国民の死因の第一位となり、現在でも年間 38 万人以上の国民ががんで亡くなっている(厚生労働省,2021).大切な人との死別は人生の中で最もストレスフルな喪失体験であり、遺族には悲嘆とよばれる身体的症状や情動的反応など様々な反応が生じる(坂口,2010).また、死別の急性期にみられる強い悲嘆反応が長期的に持続し、社会生活や精神健康など重要な機能の障害をきたしている状態は複雑性悲嘆とよばれ、精神科の専門的な治療を要する場合もある。わが国のがん遺族の複雑性悲嘆の有病率は死別の時期を問わずに見た場合では 2.3～33%に認められている(大岡ら,2019).複雑性悲嘆がもたらす有害な影響として、高血圧、がん、心疾患のリスク増大などが示されている(Prigerson,2008).すなわち遺族にとって死別体験は身体的・精神的疾患を発症させる可能性のある重大な問題であり、複雑性悲嘆を予防するための支援が重要である。

遺族への支援は、「遺族ケア」もしくは「グリーフケア」と呼ばれる(一般社団法人日本サイコロジ学会,2022).遺族ケアは十分に定義が定まっていないが、坂口(2010)は広義の遺族ケアを「遺族への直接的、意図的支援だけではなく、患者の死の前後に問わず、結果として遺族の適応過程にとって何らかの助けになる行いのこと」と定義している。死別前のケアには、充実した終末期ケアや看取りのケアがあり、福井ら(2004)は末期がん患者の家族へのインフォームドコンセント、患者へのケア教育、死の受け止めに関するケア、精神的ケアの実施はいずれも 6～7 割であることを報告している。ELNEC-J(End-of-Life Nursing Education Consortium)などの教育の充実などにより、多くの病院で実施が行われていると考えられる。死別後のケアについては、わが国の医療機関における遺族ケアの現状として、2002 年と 2012 年のどちらの時点でもホスピス・緩和ケア病棟の 9 割以上の施設が手紙送付などの遺族ケアを提供している(坂口,2016).一方で、一般病棟での遺族ケアは、約 20%の看護師が葬儀や通夜参列、手紙送付などの遺族ケアを個人的に行っていたが、ほとんどの看護師は遺族ケアを行ったことがないと報告されている(坂口ら,2005).2017 年におけるがん患者の死亡場所は、緩和ケア病棟で 19.5%、緩和ケア病棟を除いた病院では 80.5%であり、多くのがん患者は一般病棟で亡くなっている現状がある(国立がん研究センター,2018).また、緩和ケア病棟や在宅緩和ケアと比較すると一般病棟で看取りを経験したがん遺族は抑うつや悲嘆症状などの精神状態が悪いと報告されている(羽多野,2016)ことから、一般病棟で遺族ケアを促進していくことが重要な役割を果たすと考えられる。

しかし、一般病棟での遺族ケアの実施に対しては、患者に遺族ケアが必要とされているのか、という懸念が約半数の看護師から挙げられている(坂口ら,2005).また、大多数の人が亡くなる場である一般病院ではほとんど死別後の遺族ケアが行われておらず、遺族は必要な支援にたどり着けていない可能性が高いとされている(山崎ら,2022).一般病棟で遺族ケアが実施されていない理由については、看護業務の繁雑さから時間とマンパワー不足により十分な家族ケアが行われていないこと(野口,2004)や、病棟の組織体制の問題によって責任の所在や遺族ケアの方針が明確でないこと(坂口ら,2005)などが影響していると考えられる。しかし、どのような要因が遺族ケアの実施に関わっているのか系統的に明らかにした研究は見当たらなかった。そこで、本研究は研究課題 1 として、一般病棟で看取りを経験したがん遺族の医療者からの遺族ケアに対するニーズとその関連要因を

明らかにすることを目的とする。そして、一般病棟での遺族ケアに対するニーズを踏まえたうえで、次の研究課題 2 として、一般病棟に勤務する看護師の遺族ケアの実施の現状と、遺族ケアの実施に関連する要因を明らかにする調査を実施することとした。

【目的】

一般病棟で看取りを経験したがん遺族の医療者からの遺族ケアに対するニーズを明らかにすることを目的とする。また、一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施の現状を明らかにし、遺族ケア実施に関連する要因を検討することを目的とする。

【学術的重要性】

本研究は、一般病棟における遺族ケアに着目した研究である。これまでに、遺族ケアはホスピス・緩和ケア病棟が中心となり研究や実践報告が行われている。しかし、わが国におけるがん患者の多くは、一般病棟で亡くなる現状がある。多くのがん患者の家族が一般病棟で死別を経験する中で、これまでに十分に明らかになっていない遺族ケアに対するニーズや、一般病棟における遺族ケアの実施の現状を捉え、一般病棟における遺族ケアの必要性や在り方を検討するための、重要な研究である。

【対象】

一般病棟で看取りを経験したがん遺族および、一般病棟に勤務する看護師である。

また、本研究では、病棟の医療者が遺族ケアとしてがん遺族とどのように関わるべきなのかを模索するために、坂口の定義を参考に、遺族ケアを「遺族への直接的、意図的支援だけではなく、患者の死の前後に問わず、結果として遺族の適応過程にとって何らかの助けになる行い」とする。

②研究の経過(研究課題Ⅰ)

研究課題Ⅰについて、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題Ⅰ：一般病棟で看取ったがん遺族が求める遺族ケアのニーズ

実施内容：

【目的】

一般病棟で看取りを経験したがん遺族の、医療者からの遺族ケアに対するニーズを明らかにすること。

【調査方法】

インターネット調査を行った。対象者の選定と研究依頼は、インターネット調査会社(株式会社クロス・マーケティング)に委託して行った。本研究では、本調査に必要な調査対象者の絞り込みを行う事前調査(サンプル数 15,000 名)と、本調査(目標回収数 600 名)の 2 段階によって回答を得た。

【調査内容】

基本属性、複雑性悲嘆の評価(Brief Grief Questionnaire；BGQ)、死別後の対象者の対処行動(Coping Strategy after Bereavement；CSB)、遺族ケアを受けた経験、一般病棟で看取りを経験したがん遺族の医療者からの遺族ケアに対するニーズ、医療者からの遺族ケアの内容別におけるニーズ、についてそれぞれ回答を得た。

【分析方法】

対象者の基本属性や遺族ケアに対するニーズ等についてそれぞれ記述統計を行った。次に、医療者からの遺族ケアに対するニーズについて「とてもそう思う」「そう思う」と回答した「遺族ケアニーズ高群」、「どちらでもない」「そう思わない」「全くそう思わない」と回答した「遺族ケアニーズ低群」の 2 群に分け、遺族ケアの各項目のニーズの比較を行うために、Mann-Whitney の U 検定を行った。さらに、従属変数を遺族ケアニーズの高群と低群、独立変数を、基本属性および遺族ケアを受けた経験、複雑性悲嘆の有無、死別後の対処行動パターンの計 9 項目として、二項ロジスティック回帰分析(変数減少法:尤度比)を行った。なお、多重共線性については独立変数間の相関係数を確認した。有意水準は 5%とし、分析には SPSS Ver.28 を用いた。本研究は、名桜大学研究倫理審査を受けて実施した(承認番号：2023-021-1)。

【結果】

対象者概要

本研究は、600 名を対象にアンケートを実施し、600 名から回答が得られた(回収率 100%)。不適切な回答としていると判断した 213 名(35.5%)を除外し、故人の亡くなった場所を一般病棟以外と回答した 79 名を除外した 308 名のうち、遺族ケアに対するニーズおよび医療者からの遺族ケアを受けた経験が「分からない」や無回答であった 38 名を除いた 270 名を分析対象とした(有効回答率 45.0%)。対象者は、平均年齢が 54.6±16.6 歳であり、男性が 113 名(41.9%)であった。故人からみた続柄は子が 142 名(52.6%)で最も多く、死別からの経過期間は 5 年以上 168 名(62.2%)と最も多かった。複雑性悲嘆の評価では、5 点～7 点の複雑性悲嘆疑いがある者は 89 名(33%)、8 点以上の複雑性悲嘆である者は 24 名(8.9%)であり、これら 2 つを合計すると 113 名(8.9%)であった。

また、死別後の対処行動パターンについてクラスター分析を行った結果、“気そらし焦点型”、“絆の保持焦点型”、いずれの対処行動も少ない“少対処型”の 3 つに分類された。対処行動パターンで最も多かったのは、“絆の保持焦点型”113 名(41.9%)であり、次いで、“気そらし焦点型”84 名(31.1%)、“少対処型”73 名(27.0%)の順であった。

医療者からの遺族ケアを受けた経験

大切な人が亡くなられた時に医療者から遺族ケアを受けたと思いますか、という問いに「とてもそう思う」14 名(5.2%)、「そう思う」66 名(24.4%)、「どちらでもない」81 名(30.0%)、「そう思わない」69

名(25.6%),「全くそう思わない」40名(14.8%)であり,「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者を合わせると29.6%であった.

一般病棟で看取りを経験したがん遺族の医療者からの遺族ケアに対するニーズ

医療者からの遺族ケアは必要だと思いますか,という問いについて「とてもそう思う」21名(7.8%),「そう思う」97名(35.9%),「どちらでもない」95名(35.2%),「そう思わない」41名(15.2%),「全くそう思わない」16名(5.9%)であり,「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者を合わせると43.7%であった.

一般病棟で看取りを経験したがん遺族の医療者からの遺族ケアの内容別におけるニーズを図1に示す.医療者からの遺族ケアのニーズにおいて,「とてもそう思う」「そう思う」と回答したもので最も高い項目は,「患者の症状が緩和する方法について適宜情報を提供する」210名(77.8%),次いで「家族として良い期間が過ごせるように支援する」198名(73.3%)であった.一方で,医療者からの遺族ケアのニーズが最も低かった項目は,「宗教家(神父・牧師・チャプレン)や宗教組織を紹介する」が22名(8.1%),次いで「故人を偲ぶ追悼会や死別体験者同士が体験を分かち合う会を開催する」44名(16.3%)であった.

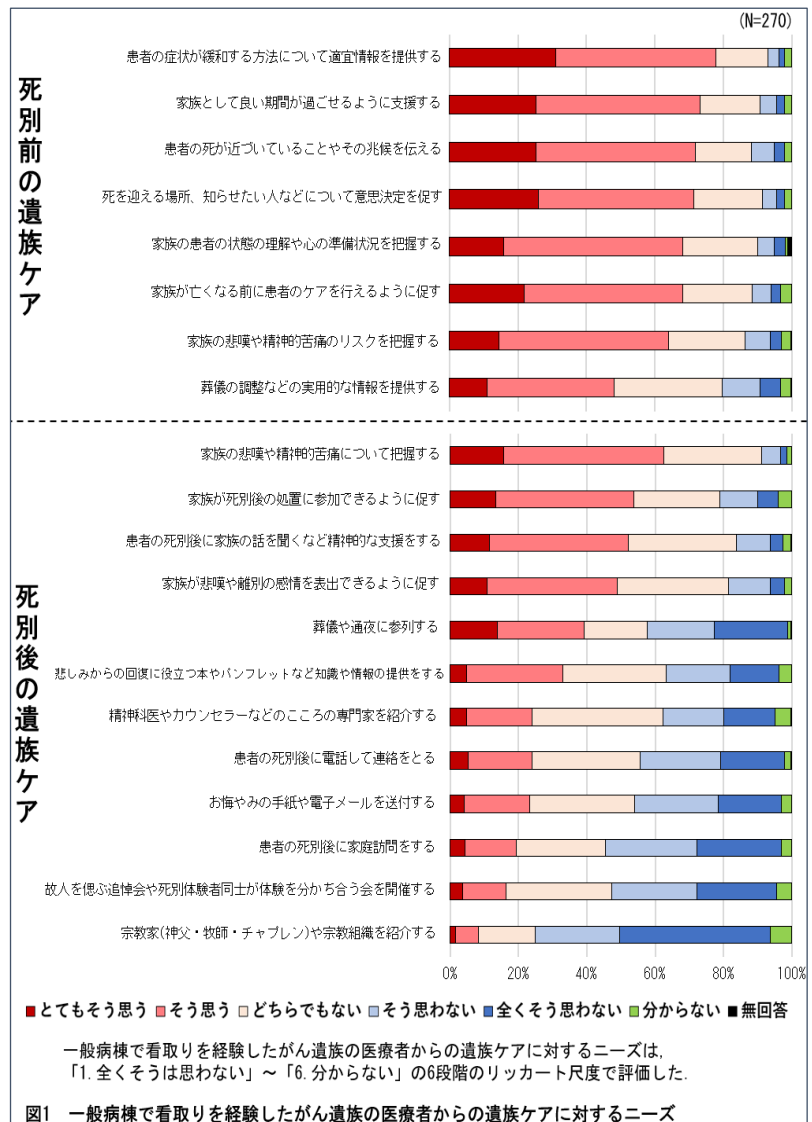


図1 一般病棟で看取りを経験したがん遺族の医療者からの遺族ケアに対するニーズ

医療者からの遺族ケアにおいて,死別前のケアに関する項目が死別後のケアに関する項目よりもニーズが高かった.

一般病棟で看取りを経験したがん遺族の遺族ケアに対するニーズと関連要因の検討

医療者からの遺族ケアに対するニーズを従属変数とし,基本属性や遺族ケアを受けた経験などの9項目を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った.その結果,「遺族ケアを受けた経験」(OR = 2.95, $P < 0.01$)のみに有意な関連が認められた(表1).

表1 遺族ケアに対するニーズの関連要因(多変量解析)

(n=237)

	n	n(%)		OR	95%CI	P
		ニーズ高群(106)	ニーズ低群(131)			
遺族ケアを受けた経験の認識				2.95	2.15-4.03	<0.01
とても思う	10	9(90.0)	1(10.0)			
そう思う	58	48(82.8)	10(17.2)			
どちらでもない	66	27(40.9)	39(59.1)			
そう思わない	65	14(21.5)	51(78.5)			
全くそうは思わない	38	8(21.1)	30(78.9)			

従属変数:医療者からの遺族ケアに対するニーズ(1.ニーズ高群/0.ニーズ低群)

死別からの経過期間,故人のがんの部位について「覚えていない」と回答した者は除いた

Hosmer & Lemeshow適合性検定の有意確率P=0.10, χ^2 値=11.93,的中率=74.7%

【考察】

一般病棟で看取りを経験したがん遺族の医療者からの遺族ケアに対するニーズの現状

一般病棟で看取りを経験したがん遺族のうち医療者からの遺族ケアを必要であると認識している者は約4割であり,それに対し,看取りの際に医療者から遺族ケアを受けたと認識している者は3割にとどまり,ニーズにおけるケアの提供がやや不足している現状が伺える。

医療者からの遺族ケアにおいて,「患者の症状が緩和する方法について適宜情報を提供する」などの死別前のケアに関する各項目のニーズは約6割以上が必要であると認識しており,一方,死別後のケアに関する項目においては,死別直後に関わる「家族が死別後の処置に参加できるように促す」などの項目は約4~5割が必要であると認識していたが,「お悔みの手紙や電子メールを送付する」などの内容は,3割未満とニーズは低かった。がん遺族の看取りにおいて十分な世話ができなかったことの後悔が挙げられており(和田ら,2021),安らかな看取りは悲嘆を軽減する要因のひとつと報告されている(坂口ら,2001)ことから,本研究の死別前のケアのニーズの高さを支持していると考ええる。一方で,手紙送付などの死別後の遺族ケアのニーズが低い理由として,死別後に支えとなった者は家族や友人と答えた遺族が多く医療専門職を挙げた者は少ないという報告(松島ら,2001)や,日本では精神保健サービスの必要性の認識が低いこと(Kanehara., 2016)が関与している可能性がある。

一般病棟で看取りを経験したがん遺族の医療者からの遺族ケアに対するニーズとその関連要因

医療者からの遺族ケアに対するニーズに関連する要因は「遺族ケアを受けた経験」のみであった。この結果は,遺族ケアを受けた経験があると認識している者ほど,遺族ケアに対するニーズが高いことを示しており,すなわち,看取りにおいて医療者から遺族ケアが必要であると判断された家族に遺族ケアが提供されていると捉えることができる。近年における遺族ケアとして死別前のがん患者の家族へのケアについて量的に捉えた研究報告がなく比較できる資料がないが,死別後の遺族ケアにおいては,死別直後のケアである医療者で行う遺体のケアを受けた頻度は48.4%,満足度は66.2%と高い一方で,手紙の送付や葬儀への参列などのケアは1.1~17.2%と受けた頻度が低く,満足度も0~18.7%であると報告があり(北得,2020),遺族に対し死別直後のケアはなされているものの,遺族が病棟を離れた以降のケアの実施頻度は一般病棟において低い現状があることがわかる。本研究では遺族ケアを受けた経験の内容を具体的にとらえていないが,この先行研究の現状を踏まえると,遺族ケアを受けた経験は,死別前から直後のケア内容を意味しており,これら経験と遺族ケアニーズが関与している可能性が推察される。

②研究の経過(研究課題2)

研究課題2について、課題名と実際におこなった内容を具体的に記述してください。

研究課題2：一般病棟に従事する看護師の遺族ケアの実施状況とその関連因子

実施内容：

【目的】

一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施の現状を明らかにし、遺族ケアの実施の認識から、遺族ケアの実施に関連する要因を検討すること。

【調査方法】

A 県内のがん診療連携拠点病院またはがん診療を行っている病院の、一般病棟に勤務する看護師で、看護師経験年数3年以上、がん患者の看取りに携わった経験のある看護師を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。

【調査内容】

基本的属性、遺族ケアの実施頻度に関する項目、遺族ケアの実施に関する項目、ターミナルケア態度尺度 FAT-COD-FormB-J 短縮版、がん患者の家族への遺族ケアについてどのように考えているのか、についてそれぞれ回答を得た。

【分析方法】

質問紙の各項目について記述統計を行い、遺族ケアの実施頻度等を明らかにした。また、遺族ケアの実施に関連する要因について、遺族ケアの実施の認識を従属変数とし、看護師要因、遺族ケアに関する知識・スキル要因、遺族ケアに対する認識要因、環境・システム要因を独立変数として、単変量解析(x²検定および Mann-whitney の U 検定)および多変量解析(2 項ロジスティック回帰分析)を行い、遺族ケア実施に関連する要因を明らかにした。本研究は、名桜大学研究倫理審査を受けて実施した(承認番号：2024-005)。

【結果】

対象者概要

がん診療を行う 18 施設のうち同意が得られた 12 施設を研究協力施設とした。質問紙および Web 回答の計 262 名から回答を得られた。本研究の対象選定基準を満たさない者および、対象者の基本的属性の欠損がある者など計 54 名を除いた 208 名を分析対象とした(有効回答率 79.4%)。

対象者 208 名の平均年齢は 39.4±10.5 歳、女性 151 名(72.2%)であった。平均看護経験年数は 14.8±9.8 年であった。遺族ケアに関する研修の受講経験の有無では、受講ありが 85 名(40.7%)、なしが 123 名(58.9%)であった。また、ターミナルケア態度尺度 FAT-COD-Form B-J 短縮版の合計点数の平均は、21.6±3.0 点であった。

一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施の現状

がん患者の家族への遺族ケアの実施の認識については、「非常にそう思う」3 名(7.7%)、「そう思う」72 名(34.6%)、「どちらともいえない」84 名(40.4%)、「そう思わない」33 名(15.9%)、「全くそうは思わない」16 名(7.7%)であり、「非常にそう思う」と「そう思う」を合わせると 75 名(36.1%)の看護師ががん患者の家族への遺族ケアを実施していると認識していた。

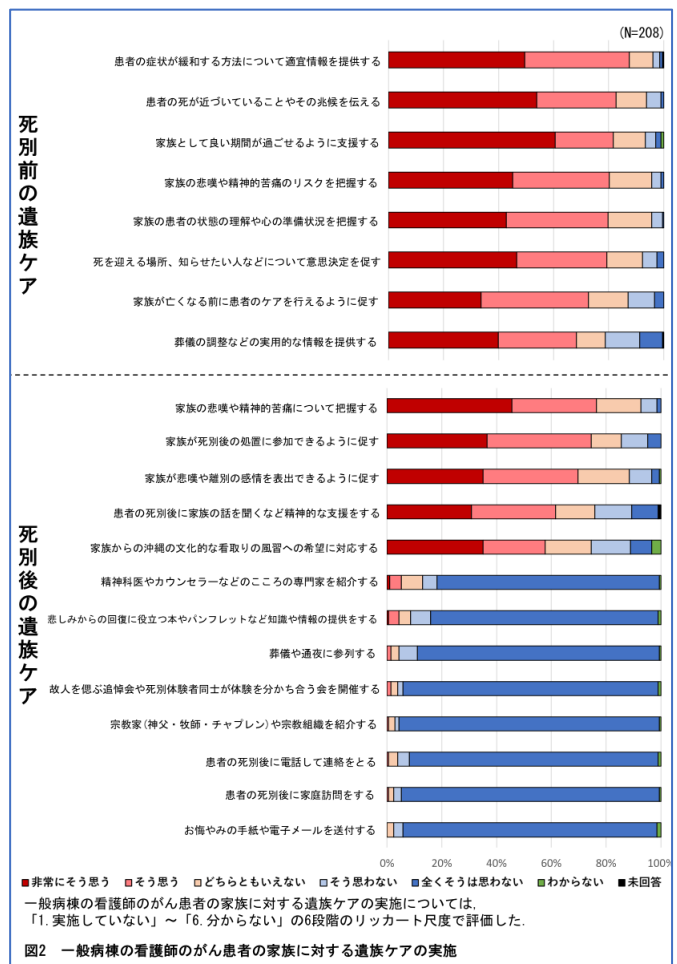
一般病棟における遺族ケアの内容別における実施割合を図 2 に示す。遺族ケアの実施のうち、死別前の遺族ケアの実施について「実施している」「ときどき実施している」と回答したもので最も多い項目は、「患者の症状が緩和する方法について適宜情報を提供する」182 名(87.5%)、次いで「患者の死が近づいていることやその兆候を伝える」172 名(82.7%)、「家族として良い期間が過ごせるように支援する」170 名(81.7%)であった。一方で、死別前の遺族ケアの実施の割合が低い項目は、「葬儀の調整などの実用的な情報を提供する」142 名(68.3%)「家族が亡くなる前に患者のケアを行えるように促す」151 名(72.6%)、「死を迎える場所、知らせたい人などについて意思決定を促す」165 名(79.3%)であった。

死別後の遺族ケアの実施で最も割合が高かったのは、「家族の悲嘆や精神的苦痛について把握する」159 名(76.4%)、次いで「家族が死別後の処置に参加できるように促す」155 名(74.5%)、「家族が悲嘆や離別の感情を表出できるように促す」145 名(69.7%)であった。一方で、死別後の遺族ケアの実施の割合が低い項目は、「お悔やみの手紙や電子メールを送付する」0 名、「患者の死別後に電話して連絡をとる」1 名(0.5%)、「患者の死後に家庭訪問をする」1 名(0.5%)、「宗教家(神父・牧師・チャプレン)や宗教組織を紹介する」1 名(0.5%)であった。

一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施に関連する要因(単変量解析)

一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施に関連する要因を分析するために、「相対的にみて、がん患者の家族への遺族ケアを実施していますか」という問いに対して「非常にそう思う」「そう思う」と回答した者を実施認識高群、「全くそうは思わない」「そう思わない」「どちらともいえない」と回答した者を実施認識低群とする 2 群に分け、x² 検定または Mann-Whitney の U 検定を実施した。

単変量解析を行った結果、有意差がみられた項目は、「遺族ケアに関する教育・研修を受けた経験」(P = 0.040)、「ターミナルケア態度尺度 FAT-COD-Form B-J 短縮版の合計点数」(P = 0.039)、「患者の死別前後に生じる家族の悲嘆について理解している」(P < 0.001)などの遺族ケアに対する知識・スキル要因 10 項目、「医療者からの家族への遺族ケアは重要である」(P = 0.004)などの遺族ケアに対する認識要因 3 項目、「病院や病棟に家族への遺族ケアを行う体制がある」(P < 0.001)などの環境・システム要因 12 項目の計 27 項目に有意差があった。なお、それぞれの項目の相関関係を検討するために Pearson の相関係数を求めた。その結果、「家族の感情表出を促すコミュニケーション方法について理解している」「傾聴に関するコミュニケーションスキルについて理解している」(r = 0.718)など 8 項目間において、強い相関があると示される r > 0.700 であった。そのため多変量解析を行う上では、相関係数が高いこれら項目については検討を重ね、「傾聴に関するコミュニケーションスキルについて理解している」などの 7 項目を削除して多変量解析を実施した。



一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施の関連要因の検討(多変量解析)

一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施認識を従属変数とし,単変量解析を行い有意差がみられた 21 項目を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った.その結果,一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施には,「家族の感情表出を促すコミュニケーション方法について理解している」,「遺族ケアの具体的な方法がわかる」,「がん患者の家族は遺族ケアを必要としている」,「医療者は,遺族ケアをボランティアで行っている」,「病院や病棟に家族への遺族ケアを行う体制がある」の 5 つが関連していた.

表2 一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施の関連要因

項目	OR	95%CI		P
		下限	上限	
家族の感情表出を促すコミュニケーション方法について理解している	1.90	1.13	3.21	0.02
遺族ケアの具体的な方法がわかる	1.56	1.03	2.35	0.04
医療者は,遺族ケアをボランティアで行っている	0.66	0.49	0.90	< 0.01
がん患者の家族は遺族ケアを必要としている	1.94	1.18	3.18	< 0.01
病院や病棟に家族への遺族ケアを行う体制がある	1.58	1.16	2.17	< 0.01

従属変数:相対的にがん患者の家族へのグリーフケアを実施している(1.実施高群/0.実施低群)

遺族ケアに関連する要因(0.わからない~5.非常にそう思う)

Hosmer & Lemeshow適合性検定の有意確率P=0.64, χ^2 値=6.11,的中率=73.1.%

【考察】

一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施の現状

一般病棟における看護師のがん患者の家族への遺族ケアの実施の認識は約 3 割であった.研究課題 1 では,がん遺族の遺族ケアに対するニーズは約 4 割であったことから,がん遺族のニーズを十分に満たせていない現状があると考えられる.各遺族ケアの実施割合では,死別前や死別後の中でも死別直後に行われる遺族ケアの実施割合は高く,死別後の遺族ケアの実施割合は低かった.終末期がん患者の家族の心残りの有無には,患者の死に対する家族の準備,病気の経過や日常生活の過ごし方に関する家族との話し合い,良好な患者と家族の関係性などが関係しており,特に患者の死に対する家族の認知と心理的な準備が重要であることが報告されている(Yamashita et al.,2017).また,患者の死に対する家族の準備を促すためには,患者の身体的・心理的な変化の予測や,患者の残された時間などについての情報提供が必要であることが示されている.本研究の死別前の遺族ケアの項目は,患者の状態の情報提供や,看取りに向けた支援など家族の悲嘆の軽減に繋がるような支援であり,実施の割合が高かったと考えられる.

死別後の遺族ケアは,項目の内容の特性の違いから,病院や病棟内で看護師が関わることのできる患者との死別直後のケアと,患者の死別後に家族が病院や病棟から離れて時間が経過してからのケアの 2 つに大別される.死別直後の遺族ケアである「家族として良い期間が過ごせるように支援する」などは,看取りに向けて残りの時間を家族として過ごせるように支援することや,患者の死が近いという現実に向き合い,看取りに向けた準備を行っていかなければならない家族を支援するためにも,これらの支援の実施の割合が高かったと考えられる.一方で,「お悔やみの手紙や電子メールを送付する」などの死別後のケアは,ホスピス・緩和ケア病棟や訪問看護と比較すると一般病棟は治療の場としての機能から家族に対して十分にケアの時間をとることができないことや,退院後の病院から離れてしまった家族との関係性が途絶えてしまうことからケアを行うことが難しく,実施の割合が低かったと考えられる.

一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施に関連する要因

また、一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施には、「家族の感情表出を促すコミュニケーション方法について理解している」、「遺族ケアの具体的な方法がわかる」、「がん患者の家族は遺族ケアを必要としている」、「医療者は、遺族ケアをボランティアで行っている」、「病院や病棟に家族への遺族ケアを行う体制がある」の5つが関連していた。これらのことから、今後一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの促進のためには、病院や病棟としての遺族ケアの実施の体制の整備を行い、遺族ケアの具体的な方法や感情表出を促すコミュニケーションスキルを強化することを踏まえた遺族ケアプログラムの検討が必要である。

一般病棟における死別後の遺族ケアの在り方

本研究の結果から、死別前の遺族ケアに対するニーズが高く、死別後の遺族ケアに対するニーズは低いことが明らかになった。この結果は、死別後の遺族ケアが必要ないとも捉えることができる。しかし、わが国では、緩和ケアの理念である「患者との死別後に家族が抱える問題や悲嘆に応じた支援を行う」もとに、ホスピス・緩和ケア病棟を中心として死別後の遺族ケアが実施されている。遺族への電話を実施している施設では遺族の複雑性悲嘆の評価指標の合計点数が有意に低かったことや、葬儀や通夜への参列を実施している施設では遺族の抑うつの評価指標の合計点数が有意に低かったことが報告されており（田口ら,2023）、死別後の遺族ケアが遺族の複雑性悲嘆や抑うつの程度の低さに影響する。これら効果は、ホスピス・緩和ケア病棟の場合だけではなく、同様にがん患者が亡くなる一般病棟においても悲嘆の軽減などの効果がもたらされると考えられる。ホスピス・緩和ケア病棟で亡くなるがん患者は一握りにすぎず、多くのがん患者は一般病棟で亡くなっている現状があることから、今後一般病棟における死別後の遺族ケアの在り方を検討することが必要になると考えられる。一方で、死別後の遺族ケアについて日本と海外を比較すると、文化的・社会的背景から死別後の遺族に対するフォローを行うための社会システムの遅れがある（多田羅,2010/横山,2015）。一般病棟において死別後の遺族ケアの構築を行っていくためにも、がん遺族の複雑性悲嘆や地域における支援体制の実態を捉え、社会としての死別後の遺族ケアの在り方や支援体制についても合わせて検討も行っていく必要があると考えられる。

③成果・期待される波及効果等

研究を実施して得られた成果および期待できる波及効果について記述してください。

本研究によって、一般病棟で看取りを経験したがん遺族における遺族ケアに対するニーズは約4割であり、死別前の遺族ケアに対するニーズが高く、死別後の遺族ケアのニーズは低かった。遺族ケアに対するニーズの関連要因は「遺族ケアを受けた経験」であることが明らかになった。また、一般病棟における看護師の、がん患者の家族への遺族ケアの実施の認識は約3割に留まっていた。遺族ケアの実施頻度は、死別前および死別直後の遺族ケアの割合が高く、死別後の遺族ケアの実施頻度は低かった。一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施の認識に関連する要因として、「家族の感情表出を促すコミュニケーション方法について理解している」、「遺族ケアの具体的な方法がわかる」、「医療者は、遺族ケアをボランティアで行っている」、「がん患者の家族は遺族ケアを必要としている」、「病院や病棟に家族への遺族ケアを行う体制がある」の5つが抽出された。これらのことから、今後一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの促進のためには、病院や病棟としての遺族ケアの実施の体制の整備を行い、遺族ケアの具体的な方法や感情表出を促すコミュニケーションスキルを強化することを踏まえた遺族ケアプログラムの検討が必要であることが明らかになった。

一般病棟のがん遺族の遺族ケアに対するニーズや、一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアの実施の現状については、これまでに報告がみられておらず貴重なデータである。今後、本研究をもとに、今後は一般病棟におけるがん患者の家族への遺族ケアプログラム構築の基礎資料となると考えられる。

④成果物

本研究について発表した論文、刊行物、シンポジウム等の情報を記載してください。

参照 URL がある場合はそれを含めてください。

R6.11.4 第4回 沖縄緩和ケア研究会 学術集会<<https://genyawolf.wixsite.com/okinawa-pcsg/blank-2>>

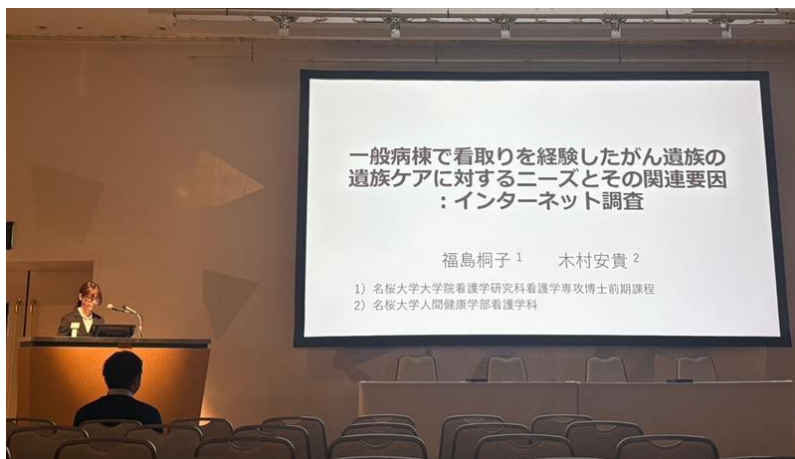
「がん遺族の医療者の遺族ケアに対する必要性の認識とその関連要因」

R7.2.22—23 第39回 日本がん看護学会学術集会<<https://plaza.umin.ac.jp/jsn39/>>

「一般病棟で看取りを経験したがん遺族の遺族ケアに対するニーズとその関連要因:インターネット調査」

⑤写真

研究実施中の様子、成果物等の写真を掲載してください。(各写真にキャプションを付けてください。)



日本がん看護学会学術集会 口頭発表中の様子